国際関連情報 Report from IASB

IASB「Accounting for Dynamic Risk Management」DPのアウトリーチ

ASBJ 専門研究員
IASB 客員研究員
山下 裕司（やました ゆうじ）

国際会計基準審議会（IASB）の「Accounting for Dynamic Risk Management」プロジェクトにつきましては、2014年4月17日に最初のマイルストーンであるDiscussion Paper（DP）を公表し、10月17日にコメントを締め切りました。

本プロジェクトの要諦は、「企業会計と企業のリスク管理活動は密接に関係しているが、経済事象を捉える上での『出発点』が異なるため、整合性を取ることが本質的に難しい」という点にあります。すなわち、企業会計の『出発的』は、「個別的（貸出・預金・債券などの一つ一つの金融商品）・静的（リスク管理対象と手段の関係が明確に1対1に紐づけされ、一度紐付けされたらその関係は継続する）」であるのに対し、銀行のALMにおける金利のリスク管理等のそれは「一体的（金利リスク・エクスポージャーのネット・ポジション）・動的（特定の紐づけはなく、しかも時々刻々と変化する）」であるといえます。

概念的にもテクニカルにも非常に難しいこのプロジェクトについて、この半年間、実に多くの方々に本DPの内容をご説明し、また意見交換をさせていただきました。地域的には、欧州、アフリカ、アジア・大洋州、北米・南米とほぼ世界中をカバーしました。また、関係者の属性も、作成者、ユーザー、監査法人、監督当局と多岐にわたりました。こうした対話を通じて、このプロジェクトがいかに難しい内容を孕んだものであるか、一方でいかにエキサイティングなトピックであるか、関係者の皆様にご理解いただけたのではないかと思います。

一方で私どもIASBの側も、密接な対話を通じて、多くの気づきがありました。また、このプロジェクトに対する期待の大きさや責任の重さを改めて認識しました。特に日本の方々は、DPの隅から隅までよく読み込んでおられる上に、ご指摘もシャープかつ有意義なものが多く、世界中で行ってきた数多くのアウトリーチの中でも特に有益なものでした。改めまして、厚く御礼を申し上げます。

私が現在の仕事を通じて強く思うのは、困難な論点を多々抱えているからこそ、新たな国際会計基準を一から考えて策定する過程は、本当にクリエイティブなものだということです。会計情報はいわば無機的な数字の羅列ですが、それを作る側も使う側も、その数値が何を意味するのか、将来を予測する上でどのように有用なのか、あるいは経営行動にどのような影響を与えるのかを巡って熱い思いを持っています。熱い思いは、様々な立場の「利害」を反映している場合もあるでしょう。当然ながら利害は対立します。しかもIASBでは、その熱い思いが世

界中のあらゆる関係者から寄せられる訳ですから、新基準の開発が困難を極めるのも止むを得ません。

先般BBCで、18世紀末のフランスにおいて、度量衡の統一を企図した「メートル法」の開発が進められた経緯や国際的普及を目指した努力を特集した番組がありました。当時のヨーロッパでは度量衡の相違が甚だしく、日常生活や商業活動、特に建築などの分野において著しい障害になっていたそうです。問題があることは分かっていてもなかなか統一されないのは、やはり個別の事情・利害があるためです。メートル法が国際性を帯びるようになったのは、フランス革命という普遍性を求める強固な精神活動と、それをベースにした「地球の大きさという普遍的なものを基準とする」というアイデアがあったとのことです。

もっともBBCがメートル法を特集したとはいえ、未だに英国では自動車のスピード規制はマイル基準であり、英国とフランスの間を車で往来するとしばらくの間スピード感覚が麻痺します。とはいっても所詮は1マイル＝1.6 kmという比例関係がありますから、1時間程度ですぐ慣れます。

しかし、会計基準の相違や改定はマイルとkmの関係よりはるかに複雑です。これまで認識されてなかったものが認識されたり、測定のベースが全く異なるものとなったりします。この意味で私は、新たな国際会計基準の開発は、フランス革命に匹敵するような精神活動のような気がすることさえあります。

もっとも、国際会計基準が世界でさらに受け入れられていく上での手段は、フランス革命のような軍事活動ではなく、粘り強くかつ非常に透明性の高い対話プロセスです。本プロジェクトはこれから今まで以上に難しい段階に入っていきますが、私はこのプロセスの最前線にいることを日本人として誇りに思っています。また、日本人が国際基準開発の最前線で力を発揮していくこと自体が、国益に適うことと考えています。日本の皆様からの一層の叱咤激励を心より期待しております。